

+ 37 【ううと】

ぼくの親戚にもいましたが、なんでもかんでも拝む人がいます。

神社でもお寺でも教会でも拝む。

起きたときも寝るときも食べるときも拝む。

ありがとうで拝み、すみませんで拝み、こんにちはで拝み、さようならで拝む。

ぼくは基本的に拝む人が好きです。

拝む人の気持はわからないけれども。

そういえば拝むおばけの話をききました。

懐爺は、そのおばけを【ううと】と呼んでいました。

「【ううと】は、なんでおがむのかのう」

懐爺にきくと、

「金ちゃんが拝むときは、どういうときですか」

逆にきかれました。

「そらあきまつとるじゃろ。ねがいがかなうようじゃ」

「拝んで願いが叶ったことがありますか」

「おぼえとらんが、たぶんいちどもなかったのう」

「それは拝みかたが足りないんです。すくなくとも【ううと】はそうおもいこんでいて、それでなんでもかんでも拝むのです。拝みたおすのです」

「【ううと】のねがいは、それでかなったのかのう」

「叶いませぬ。拝まないと叶わないことは、拝んでも叶わないのです」

わけがわからんが、

「ほんじゃ【ううと】はかなしむじゃろう」

「それがおばけの困ったところで、悲しむ前に怒り出します」

懐爺は困った顔をしました。

「まるで、むらやくばの、まさひこさんじゃのう」

「それなんですがね。村役場の経理（けいり）の正彦さんが、じつは【ううと】だったのです」

「あらま、そうじゃったか」

「それがいままでは猫をかぶっていて、なんでもかんでも拝む人だったのに、それで周りも謙虚（けんきょ）な人、優しい人だと、親しんでいたのに、去年から化けの皮がはがれてきて、すぐにきれて怒ってばかり」

懐爺はもっと困った顔をしました。

「そいつは、まわりもたいへんじゃのう。しょうがっこうのかわかみせんせは、おこるりゆうがあっておこっているんじゃが、まさひこさんは、なぜにおこっているのか、ちっともわからんからのう」

「しかも役場のお金を横領（おうりょう）していたのですよ」

「おうりょうたあ、ちょろまかすことかい」

「そんなかわいいものではありません。下手すると村がつぶれるくらいの横領です。経理なんですから、大変な罪ですよ」

「それでまさひこさんは、かんごくいきかい」

「それが困ったことに、訴えたら自殺すると村長を脅（おど）かすんですね。おばけが自殺するわけではないのに」

懐爺はますます困った顔をしました。

「そんちょうさんは、やさしいからのう」

「でもこのままでは、【ううと】の思う壺です。【ううと】は自分勝手に拝むおばけですから、村のことや村びとのことなんか、どうでもいいんです。それをいままで周りはんちがいしていました。本質的に優しい人は、自分のために拝むのではなく、他人の幸福のために祈ります」

それはそうだ。

「かいじいは、どうするつもりかのう」

「いくらおばけでも、いくら横領しても、消すわけにはいきません」

「どうしてじゃ」

「一寸の虫にも五分の魂（たましい）、という言葉を知っていますか」
知っているかという言い方は失礼なものです。

皆さんも気をつけてください。

「しらいでか。わしがしらんのは、おとことおんなのまぐわいかただけじゃ」

「それはわたしも知りません。誰か教えてくれませんかねえ」

「としよりには、ふようじゃ」

「それが、いい薬を開発（かいはつ）しました」

「よけいなことせんでええ。よけいなこともいわんで、さきをいえや」
「はい。【ううと】はおばけの世界でもちっぽけな存在で、しかも嫌われ者です。そんなちっぽけなおばけにも、ちっぽけな魂があるから、よほどの理由がないと消せません」

「かいじいらしくないのう」

「わたらしいとは、どういうことでしょうか。すぐに殺すのがわたらしいのですか」

「そうじゃ」

ぼくは【きめんとう】事件を思い出していました。

「今のわたしは、若い時代のわたしではありません」

懐爺の声がきつかったので、

「すまんのう。いいすぎた。おばけをけすのは、とくいじゃろ、という
いみでいったんじゃ」

「それは大悪党のおばけの場合です。小悪党を消すのはさすがに躊躇(ちゅうちょ)しますね。ちっぽけなおばけは、人間にばけても、ちっぽけな人間にしかありません。ちっぽけな人間は、ほうっておけばいいんですよ」

おばけに大も小もないとおもったが、一応納得しました。

「そういうもんかのう」

「本当は【ううと】を消すのは簡単です。【ううと】は蛞蝓(なめくじ)のおばけですから、塩をふりかければ消えてしまいます」

「あたっていたのう。まさひこさんのあだなは、なめくじじゃから」

「よく似ていますからねえ」

ふたりして笑った。

「わしがやったる。しおをふりかけたる」

「やめてください。蛞蝓を消したら、金ちゃんが蛞蝓臭くなりますよ」

「なめくじくさいのは、いやじゃのう」

というわけで、【ううと】は相変わらず怒ったりお金をごまかしたりしていましたが、いつのまにか消えてしまいました。

ぼくは絶対に、懐爺が塩をふりかけたのだとおもいました。

ぼくにそれをやらせなかったのは、ぼくを蛞蝓臭くさせなかったのは、懐爺の思いやりだとかんがえました。

懐爺なら元々臭いので、しかもあれこれたくさんの臭いがまじった臭さなので、ひとつくらい臭いが増えても問題ないとかんがえたのでしょう。

けれども一か月ほど経って、真相（しんそう）がわかりました。

漬け物を作るための塩をしこたま抱えて、村役場にやってきた荒物屋のおばあさんが、なんの拍子か転んで塩を空中にぶちまけた。

その塩を正彦さんが、いや【ううと】が、運悪く（もしかすると運良く）頭からかぶってしまったそうです。

天から塩がふってきたのですから、【ううと】は天罰（てんばつ）とおもったことでしょう。

荒物屋のおばあさんは、わざとやったわけではないので、蛞蝓臭くはなりませんでした。

めでたしめでたし。